

プログラム・ノート

片桐卓也

室内楽の形は実に多様だ。今年のフィナーレでは、様々な編成による作品が登場する。弦楽四重奏曲でチェロが2本の編成もあれば、管楽器、打楽器が登場する作品もある。それぞれに違った形の味わいがある。それを楽しんでほしい。

グリンカ：ベッリーニの『夢遊病の女』の主題による

『ディヴェルティメント・ブリッランテ』変イ長調

ピアノ五重奏にコントラバスが加わった編成による楽曲。ミハイル・グリンカ(1804～57)はロシア近代音楽の父と呼ばれる存在である。サンクトペテルブルクで学んでいる時に、「ノクターン」の創始者として有名なピアニスト、ジョン・フィールド(1782～1837)の教えを受けた。1830年にはイタリアを訪問し、ベッリーニやドニゼッティと親交を結んだ。その時代の成果として生まれたのがこの作品である。曲は3つの楽章からなる。第1楽章はラルゲット～モデラート～アレグレット。短調に転ずる第2楽章はアンダンテ・カンタービレ。第3楽章はヴィヴァーチェ。終始、ピアノが華麗なテクニクを聴かせる。ベッリーニのオペラ『夢遊病の女』は1831年初演。スイスのとある村を舞台にした恋物語。主人公のアミーナが夢遊病であることから、このタイトルが付けられた。

ロッシーニ：チェロとコントラバスのための二重奏曲 二長調

イタリアの作曲家ジョアッキーノ・ロッシーニ(1792～1868)は19世紀初頭のヨーロッパを席卷したオペラ作曲家であった。当然のことながらオペラの数は膨大だが、室内楽曲は数少ない。チェロとコントラバスという低弦楽器のために書かれたこのデュエットもその中の1曲である。この曲は3つの楽章から構成される。第1楽章 アレグロ。第2楽章 アンダンテ・モツォ。第3楽章 アレグロ。いずれもロッシーニらしい晴朗な歌に満ちている。

コミタス(アスラマジャン 編曲)：『アルメニア民族音楽14の小品』より

「私の赤いハンカチーフ」「雲」「祭りの歌」

チャイコフスキー(ドゥビンスキー 編曲)：『子供のアルバム』作品39より

「フランスの古い歌」「優しい夢」「民謡」

ツィンツァーゼ：『ジョージア民謡による小品』より

「口うるさい女房」「蜚」「田舎の踊り」

クス・クアルテットによる弦楽四重奏用に編曲された作品の花束。ヴァルダペット・

コミタス(1869～1935)はアルメニア生まれの作曲家で、アルメニア国立音楽院の創設者のひとりである。一時期ドイツで学んだ後、アルメニアに帰国して作曲などを教えた。アルメニアの民族音楽をもとにした数多くの作品がある。ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840～93)が1878年に作曲した『子供のアルバム』は彼の甥ダヴィドフに捧げられた24曲からなる曲集。その中から3曲が演奏される。スルハン・ツィンツァーゼ(1925～91)はジョージア(グルジア)の作曲家。チェロ奏者でもあり、弦楽四重奏団のメンバーとしても活躍した。ジョージアの香り高い作品を多く書いた。

ドホナーニ：六重奏曲 ハ長調 作品37 より 第1楽章、第4楽章

ピアノ四重奏にクラリネットとホルンを加えた編成による作品。作曲者のエルネー・ドホナーニ(1877～1960)はハンガリーの作曲家、ピアニスト。この作品は1935年作曲で、4つの楽章から構成されている。ここで演奏される**第1楽章**はアレグロ・アパッショナート。ホルンの朗々とした響きにクラリネットが絡んで始まる。暗い情熱を秘めた音楽が展開される。**第4楽章**はアレグロ、ヴィヴァーチェ・ジョコソのフィナーレ。軽快なピアノの主題に乗って、各楽器が歌い始める。

バーバー：弦楽のためのアダージョ

弦楽合奏のための作品。サミュエル・バーバー(1910～81)は20世紀アメリカの作曲家である。カーティス音楽院で学んだ後、奨学金を得てイタリア、ローマに1935年に留学。そこで弦楽四重奏曲第1番を書き上げた。その第2楽章を、後に弦楽合奏用に作曲者自身が編曲した作品だ。初演は1938年にアルトゥーロ・トスカニーニ指揮NBC交響楽団によって行われた。静かな開始部から、途中での慟哭するようなクライマックスに展開する。映画音楽(例えば1986年公開の『プラトーン』)などにも使用されたことで、有名となった。

エルガー：『序奏とアレグロ』 作品47

この曲ではサントリーホール室内楽アカデミーのファカルティ(講師)とフェロー(受講生)が共演する。エドワード・エルガー(1857～1934)はイギリス近代を代表する作曲家。この曲は弦楽四重奏と弦楽合奏のための作品で、バロック時代のコンチェルト・グロッソ(合奏協奏曲、オーケストラの中のメンバーがソロを演奏する形)のスタイルを踏襲した構成となっている。弦楽四重奏と弦楽合奏が対比される。序奏はアンダンテ。ト短調でやや重々しく始まる。短い経過部を経て、活気あるアレグロへとつながって行く。エルガーの充実期の作品である。

マルティヌー：四重奏曲 H. 139

クラリネット、ホルン、チェロ、スネアドラム(小太鼓)という珍しい編成による楽曲。作曲者のボフスラフ・マルティヌー(1890～1959)はチェコ生まれ。故郷で活動した後にパリ、アメリカ、さらにはヨーロッパ各地で活動し、結局チェコには帰国しないで亡くなった。その間に膨大な作品を残している。この四重奏曲は全部で3つの楽章——アレグロ・モデラート、ポーコ・アンダンテ、アレグレット(マ・ノン・トロツポ)——から構成されている。第1楽章は冒頭から小太鼓が登場。第2楽章はチェロが朗々と歌い、そこにクラリネットと小太鼓が絡む。第3楽章は軽快な小太鼓のリズムに乗せて、その他の楽器が競うように歌い合う。

アレンスキー：弦楽四重奏曲第2番 イ短調 作品35 より 第2楽章、第3楽章

弦楽四重奏ながらチェロが2本という興味深い編成による楽曲。作曲者のアントン・アレンスキー(1861～1906)はロシアの作曲家で、サンクトペテルブルグでリムスキー＝コルサコフ(1844～1908)などに師事した。後にモスクワ音楽院に招聘され、作曲科の教授としてラフマニノフ、スクリャービン、グレチャニノフなど、多くの才能を育てることになる。若くして亡くなったために作品数はそれほど多くないが、室内楽でも2曲の弦楽四重奏曲、2曲のピアノ三重奏曲、ピアノ五重奏曲などを残している。この弦楽四重奏曲第2番は1894年の作品で、全3楽章。第2楽章は変奏曲(モデラート)でチェロ2本による深い響きが印象的。第3楽章はアンダンテ・ソステヌート～アレグロ・モデラートのフィナーレ。穏やかに始まるが、最後は明るく盛り上がり終わる。

(かたぎり たくや・音楽ライター)